

レナ推しの、レナ推しによる、レナ推しのための小説

レナ推し

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

レナ推しです。

レナ推しのためのとか書いちゃいましたが、私の好みとひどい文章力で書いたものなので、原作のあの最高カツプルを壊したくない方はブラウザバックをお願いします。

設定は全て解決した後から次の年の春祭りまでの空白期間を自分の勝手な想像で埋めたものです。本編のようなドラマティックな話ではなく、2人の幸せな日常を綴っていきます。

処女作なので、小説のルールに則つてかけてるか怪しいですが、読んで楽しんでいただければ幸いです。

みなさん、レナ・リヒテナウラーを愛しましょう。

お盆
G
I
F
T

目

次

GIFT

俺が目覚めてから1週間。全ては大団円を迎える、俺の傷も癒えたことで本格的に日常生活がリスタートした。ただ一つ、昔の日常と違うのはその生活の中に俺の恋人、レナがいることである。2人がいたからこそ全てがうまくいった。ハッピーエンドまで持つてこれた。全てを乗り越えてきた俺たちは一緒に素晴らしい日々を過ごす：はずだったのに。

玄十郎「その束には判子を押せ。それが終わればパソコンで入力してもらうことがあるからな。儂の言うこと以外はするでないぞ。」

なんで祖父ちゃんとばつかり顔を合わせてるんだよ！

学生の俺は治りが早かつたから良かつたものの、手綱を握っていたせいで祖父ちゃんは手首を捻ってしまい書類仕事ができなくなつたらしい。そのおかげで放課後はレナとほとんど顔を合わせず祖父ちゃんのもとで書類を捌いていた。

将臣「あのー祖父ちゃん、隠居したんじやなかつたの？　なのにこの書類の量。老人がやる量じゃないと思うんだけど。」

レナが仕事で会えない気を紛らわすにはちょうどいいかもしけないけど、さすがに高校生にこの量はきつい。

玄十郎「志那都荘にはもうほとんど手を出しどらん。これは穂織の自治仕事だ。観光客についてのものは旅館の者が適切だと言われてな。お前が穂織に残るというのであれば、いずれこういった仕事も任されることになるだろう。」

たしかに祖父ちゃんはまだ健康だし仕事を任せても平氣かもしね

ない。しかし俺は違う。書類仕事なんて初めてだ。祖父ちゃんの手首が治る前に俺を腱鞘炎にさせる気かっての。

将臣「こちらの書類、判子押し終えました。はあ、レナに会いたい。」

玄十郎「そのセリフももうこれで何度目だ。まあいい、休憩をいれよう。茶を淹れてこい。」

将臣「俺の仕事増えてるじゃん…」

渋々お湯を沸かし始める。たしかこの前レナに教わった淹れ方だと…つは！これ以上レナのこと考えるともうダメだ。会いたくて仕方なくなる！（もうなつてる）

将臣「はい、どうぞ。で、なんで今日になつて俺に仕事をさせたの？俺が寝てたときは廉太郎にやらせてたらしいじゃん。」

玄十郎「あいつはダメだ。仕事をせん」

将臣「あー、なるほど。納得したわ。」

あいつのクズっぷりと祖父ちゃんと小春からの嫌われ具合は群を抜いていて、俺もあいつの話は大抵信用してない。因果応報、いい気味だ。

玄十郎「ところで将臣はこれからどうするのだ？」

将臣「どうするつて？レナと仲良く愛を育んでいくつもりだけど。」

玄十郎「もう息をする要領で惚気てるのか……いやそうではなくてだの、これからどこで過ごすつもりだ。ここに居座るつもりならば働いてもらうぞ。」

将臣「働く者食うべからずってことか。」

いくらこの地のヒーローであつたとしてもそれがのんびり過ごしていい理由にはならない。それを知っているのほんの数人だ。とうかそれも俺1人の力じやないし。

恥ずかしい話、レナだけがバリバリ働いていて俺がグダグダしているのはなんかヒモみたいでちょっといやなんだよ。

玄十郎「で、どうするのだ？」

祖父ちゃんはいつもの凄みのある目で見てくる。

最初つから答えは決まっていた。俺はもう穂織の地を離れることはできない。きっと一生ここで暮らすことになるだろう。そんなわかりきった問答でも、口に出すことに意味はあつた。

祖父ちゃんが聞きたいのは俺の答えじゃない、俺の心だ。

祖父ちゃんの方へ向き直り姿勢を正す。

将臣「祖父ちゃん、俺をここで働くさせてください。」

人生で一番というくらいにビシツとお辞儀をした。

玄十郎「ああ、わかった。最初は掃除などの下働きになるだろう。昔のお前でも態度だけなら同じことができただろうが、今のはそこにつきつちりと誠意がこもつてあつた。将臣、お前は変わつたな。」

顔をあげると祖父ちゃんが穏やかな表情をしているのがわかつた。祖父ちゃんの言う通り間違いなく穂織に来る前と来た後の俺はまったくの別人だろう。

経験したこともそうだが、俺は今しんじられないほどの良縁に恵まれている。ここに住んでいる人たちとの繋がりは、俺にたくさんの影響を与えてくれた。まさしく縁だ。

将臣「それもなにも祖父ちゃんが手伝いに呼んでくれたのがきっかけだよ。本当にありがとう。」

玄十郎「ははは。きっかけはそうかも知れんが、今を創つたのは儂だけではない。色々な人の想い、偶然、必然、歴史、そしてお前の志の強さ。すべてが織り成して出来上がつたのだ。素晴らしい贈り物まで連れてきてな。」

そうやつて祖父ちゃんは日差しの漏れ出た障子のほうに目を向ける。「とつとつとつ」と足音がきこえてきた。俺はつい頬を緩めてしまう。

レナ「大旦那様、入つてもよろしいですか？」

玄十郎「ちょうど今休憩に入つたところだ。遠慮せず入つてきなさい。」

レナ「失礼します、マサオミー！会いたかったでありますよ!!!」

将臣「レナ！来てくれたんだな、ありがとうございます！」

我が愛しのレナだ。なんて可愛い子なんだろう。そして俺はなんて恵まれているんだろう。なのに学校が終わつてから3時間も会えなかつたなんて、地獄じやないか。

玄十郎「休憩は15分だからな、」

祖父ちゃんは気を利かせて部屋を出て行つた。その粹な計らいを見て俺たちは微笑みあつた。そこからはもう2人の世界。

レナ「私、やつぱり穂織に来れて本当に良かつたです。将臣はもちらんですが芳乃や茉子、ムラサメちゃんに出会うことができました。大好きな友達がいることはなんというか、すごく幸せですね。」

将臣「俺たち2人なら友達のためになんだつてできるさ。これからも穂織で人との縁を繋いでいけたらいいな。」

レナ「まあ将臣に出会えたつことが一番嬉しいのでありますよ！さつきも将臣のことを好きになれて良かつたつて思つたところです。」

『俺もだよ』という言葉のかわりにレナのおでこにコツンと自分のを重ねる。それだけで意思が伝わった。

レナ「マサオミの幸せ、温もり、ちゃんと分かりますよ。昔一緒に寝てた時もこうしましたね。」

将臣「ああ、あのころはまだ付き合いたてだったね。でも、今もそれと同じくらいの幸せを感じてるよ。また同じ夢見れたりしないかな？」

レナ「昨日わたしの夢には、マサオミが出てきましたよ？」

目を開けて見てみるとその顔は赤く染まっていた。……どうやら夢の内容は聞かないほうがよさそうだな。

改めて思ったがこんなに近くにてくれる事が幸せでたまらない。しかし少しするとレナはパッと離れてしまった。少し寂しいな…：

レナ「マサオミの幸せ、分けてくれてありがとうございます。むふふ、お返しです！」

俺の頭が胸に埋めさせられた。こ、これはすごい圧だ。人類の神秘を感じている気分だぜ。

レナ「こうしていると、マサオミを大事にできる気がします。私の想い、伝わりますよね。」

暖かい。レナの香りと一緒に流れてくる想いは、ほんの数秒で俺の心をいっぱいにした。こんなにも幸せなひと時、ほかにあるだろうか。

幸せなのは確かだけれど、流石に無呼吸でいるのは苦しい。
もつたいない、ひつじようにもつたないが、レナのホールドを抜け出し、顎をレナの肩に乗せる。俺からも抱きしめ返した。

縁

将臣「俺もレナのことを抱きしめたい。やっぱりこっちも好きだ

な。」

レナ「まったく、マサオミは欲張りさんです。しようがないですねー。」

直接見ずとも彼女の笑顔がありありと浮かぶ。レナの笑顔は花みたいだ。太陽みたいだ。どこまでも大切にしようと思える。

将臣「レナ、穂織を救ってくれてありがとう。」

レナ「将臣。目が覚めてから毎日それ言つてるじゃないですか。言つた筈です、こうなれたのは私と将臣、2人がいたからだつて。」

将臣「それでも言わせてほしい。ほんとうに、ありがとうございます。」

レナ「そこまで言うならしようがないですねー。じゃあお礼に将臣との愛を、この変わることのない縁を、約束してください。」

将臣「勿論。」

レナ「手、繋いでいいですか?」

無言でレナの柔らかな手をとる。最初は優しく包み込むように。俺がぎゅっと強くすると、レナも優しく握り返した。それだけで思い起こされるたくさんの思い出。きっと忘れる事はない。数秒見つめ合うと自然と顔と顔が近づく。

そして、触れ合う。

レナの心と俺の心。最初つから重なつていたように暖かい。

俺はこの2人の絆を、この気持ちを、暖かく繋がれた手と手に誓う。

将臣「レナ、大好きだよ。永遠に、ずっと。」

レナ「私もです、マサオミ。永遠に、ずっと。」

お盆

今年ももう8月。よくよく考えると俺が来てからそこまで時間は経っていない。それなのにここにいることが完全に当たり前となつたのはこの数ヶ月がとてもなく濃かつたからだろう。

そんなことを夕食を食べながらぼうっと考えていた。

将臣「もうお盆になるね。夏の間はずつとこっちにいる予定なんだけど大丈夫かな？」

玄十郎「ああ、構わん。ただし冬や春ほどではないが繁忙期になるからな。容赦なくこき使つてやる。」

将臣「それは心得てる。そういうば曾祖父さんたちのお墓にも随分と行つてなかつたな。今年はちゃんと挨拶させてもらうよ。」

レナ「将臣、お盆つてお茶を運ぶときのこれじゃないんですか？」

レナは志那都荘で使われているお盆を指しながら言う。今では祖父ちゃんとレナ、俺で食卓を囲んでいるのだ。志那都荘の従業員は本來別のところで食事をするようらしいけど、レナは女将から特別に許可をだしてもらつていた。

将臣「日本じゃ8月の13日から15日は（先祖様がこっちに帰つてくるとされているんだ。お盆はその間にご先祖様に挨拶したり歓迎したりする日本文化のことだよ。北欧はわからないけど、西ヨーロッパでいうハロウィンとか似たものだと思う。」

レナ「へえ、そうなのでありますか。また難しい単語が増えましたね、うむむ……」

お盆、お盆とレナが復唱している。

玄十郎「そのことはきつちり教えとくべきだつたか。そうだ、今年はリヒテナウアーケンも一緒に墓参りをしよう。新しい家族ができ

ましたとな。」

俺とレナは顔を見合させて微笑む。2人とも頬が若干赤くなつていた。

将臣「できる」となら朝武家の墓参りにも行きたいな。もう他人事とは到底思えないし。」

レナ「そうですね。明日お参りに行くときにお願いしてみましょう！」

もう学院は夏休みに入つたけれど、建実神社には毎日参拝している。神社としての役目は朝武さんや安晴さんが尽くしてくれるだろうから、知る者としての役目は俺たちが担うべきだ。

俺たちはそのあとすぐに朝武家に連絡して許可をもらうことができた。13日の夕方から来て泊まつていつてほしいとの要望が朝武さんから上がつたので。俺たちは2回目のお泊まり会を楽しむこととなつた。

* * * * *

連絡してから2日後の夕方、俺はレナと2人で実誠神社へと歩を進めていた。珍しくも今日はどこも店じまいが早く、あたりは閑散としていた。

レナ「今日はなんだか人気が少ないですね。」

将臣「まあお盆だしね。日本人の数少ない長期休みだから。」

レナ「日本人は休みが少なすぎます。私は志那都荘で働くことに満足していますが、フィンランドであんな働くことが多かつたら苦情が来ますよ。」

フィンランドはとてもゆつたりした国らしい。レナから話を聞くたびに行つてみたいと思つてしまう。

将臣「日本のなかでも穂織はかなりゆつたりした場所だろうけどね。」

芦花姉は明らかに働きすぎだらうけど……

とかいつてるうちに実誠神社まできてしまつた。ここは長い階段の上にあるので穂織一帯が見渡せる。この景色に勇気付けられることもあれば苦しめられることもあつたんだろう。それを断ち切れたんだ。本当によかつた。

レナ「ヨシノー、マコー、ムラサメちゃんー、きましたよ！」

芳乃「こんばんは、レナさん有地さん。」

楽しみだつたのか、朝武さんの頬が笑みをこらえられていない。それをみて常陸さんも笑みを浮かべている。

茉子「お二人ともこんばんは。今日は来てくださいありがとうございました。芳乃様は今日が楽しみで仕方なかつたようで、今日一日ずっとにやにやしていたんですよ。」

芳乃「茉子？ 言わなくていいことつてあると思うの。」

ムラサメ「これこれ、そんな小さなことで怒るものではないぞ？」

もうすぐ日が落ちる。そろそろじや。ほれ、一つ目がつきおつたぞ。」

太陽が西の山に隠れ、一気にあたりが暗くなる。それとは対照的に穂織の町の中に一つ、灯がともつた。

将臣「迎え火、か……」

レナ「ムカエビつてなんですか？」

茉子「お盆でいらっしゃるご先祖様が迷わずここにたどり着けるようにするための印です。『迎える火』で迎え火ですね。」

芳乃「文化が色濃く残つている穂織だとこうして全ての家が火を炊くんです。建実神社からの眺めは見ものですよ。」

さつきの一つを皮切りに次々と灯がともつていく。穂織の端から端まで、どの家もだ。

百数に及ぶそれは、まさしく“絶景”――

レナ「はああ。将臣、綺麗ですねー。」

将臣「ああ、とっても綺麗だね。」

隣でレナが感嘆の声を漏らす。景色だけでも圧倒させられるが、この灯一つ一つに先祖への想いが込められていると思うと、自然と目頭が熱くなつた。

それはレナも同じだつたようで互いの目元をぬぐい合う。

将臣「朝武さん、誘ってくれてありがとうございます。」

芳乃「いえ、こういう感動を友達と分かち合いたかつただけです。お泊まり会の口実にもなりますしね。」

ムラサメ「ご主人、最後のが一番の本音じやぞ。」

芳乃「もうっ！ ムラサメ様まで私をからかうんですか！」

安晴「おーい、準備したから僕たちも炊こうか。」

芳乃「はい、みなさんもこっちに！」

朝武さんが満面笑みで誘つてくる。どうやらこれも楽しみの一つだつたようだ。みんなでやるということからかけ離れた場所にいた彼女はそういうことが好きでたまらないんだろう。

とはい火種は一つしかないでの灯すのは朝武さんだけなんだけど。

芳乃「じゃあ、いきますよ。」

全員がそれを暖かく見守る。この灯を頼りに来てくれるのかと思うと感慨深い。俺は今、朝武家にとつてとても大事な瞬間に立ち会つ

てるんじゃないだろうか。

芳乃「来て、くれますかね……」

レナ「きっと来てくれるでありますよ。もし私がご先祖様なら、急いでやつてきて芳乃を抱きしめます。」

そう言つてレナは朝武さんに抱きついた。可愛い女の子同士がイヤイチャしてる……百合百合しくていいね。

茉子「有地さんは女の子には嫉妬しないタイプなんですか？」

将臣「そりや流石にしないかな。そこは寛容でありたい。」

茉子「あは、なるほどなるほど。有地さんは百合がお好きなんですねー。」

将臣「な、なぜバレたつ！」

ムラサメ「ご、ご主人にそういう趣味があつたとは……やはり男はわからぬものじやのう。」

レナ「茉子、ユリつてなんですか？ 将臣の好きなこともつと知りたいです。」

芳乃「こら！ レナさんに変な言葉を吹き込まないでください！」

レナが純粹無垢な笑顔で聞いてくる。うう、胸が痛い。これは聞かれるとマズイ。

芳乃「というか有地さん、今まで私たちをそんな風に見ていたんですか？」

朝武さんがじろりと睨んでくる。こつちはこつちで攻撃力高いな。

将臣「す、すみません。」

芳乃「もう、まったく。こんなやりとりご先祖様には見せられませ

んよ。私はもう中に戻ります。今日の料理は茉子だけじゃなくて私の手伝つたんです。」

茉子「楽しみでいてもたつてもいられないから…なんて可愛い芳乃様の理由は置いておいて、お二人はもう少し残つてみてはいかがですか？」というか、もう少し遅れて来てくださると有難いです。まだ準備が残つてますので。最後に灯が消えるのを確認してから来てください。」

将臣「いや、俺たちも手伝うよ。何から何までしてもらうのは申し訳ないし。」

ムラサメ「ゞ」主人、こゝまで2人つきりでこんなろまんていつくな場所に残そとここまで口実を作つたんだぞ？」

将臣「え？ ああ、そういうなら遠慮なく…」

三人は俺の返事に満足したようで、微笑みを浮かべて中にはいつていつた。

レナ「将臣、綺麗ですね。」

将臣「レナ、本当に綺麗だ。」

さつきと同じやりとりを今度は手を繋いで。2人きりで。キスするにはこの景色から目を話すのがもつたいない気がして、今はただ肩をくつつけるだけだ。

レナ「将臣、やっぱり穂織のために頑張つてよかつたですね。」

将臣「よかつたね。大切な友達ができだし、その人たちの幸せを作れた。大事な場所をみつけられたらし、思い出もたくさんできた。」

レナ「そこに彼女ができるというのは入つていないのでですか？」

将臣「レナと結ばれたのは運命だから。」

レナ「ふふ、嬉しいですね。私と将臣が運命……」

将臣「そうだよ。この土地で巡り会えた、縁。レナ曾曾曾曾おじいちゃんのころから決まつてた運命。」

レナ「私の（ご）先祖様たちもきてくれますかね。」

将臣「フィンランドからじやちよつと大変かもね。でも、きっと来てるよ。」

レナ「そうですね。きっと来ます。今も私を見守ってくれてるはずです。」

もう一度、この景色を目に焼き付ける。来年も、再来年もずっと見にきたい。けれど今日のこの景色は今日だけのものだ。レナと付き合つて初めてこの景色を見れた。

将臣「そろそろもどろうか。あんまり待たせるのも申し訳ないし。」
レナ「はい。芳乃と茉子の料理、楽しみですね。」

美しい眺めを背景に、俺たちは優しく口づけを交わした。

次の朝、まずは憑き代にお祈りを捧げようと本殿に行つた。

昨日は遅くまで遊んでいたし若干体が重い

深く深くお辞儀をしてから懇き代の前に正座する
その時たゞた

白豹『やつと来たか、遅い！朝から女子と戯れて神の前に出るのが遅れるとはどういうつもりだ。』

将臣「うわああああああ！」

レナ「マサオミ!? 急にどうしたんですか?」

将臣「い、今コマの声が聞こえたんだけど……レナには何も？」
レナ「そんなことあつたら私も驚いてます。少し昨日は夜更かしてしまいましたし、疲れているんじやないでしようか？」

将臣「うーん、そういうんじやないと思うけど。とりあえずお祈りを続けようか。」

そう言つて目を閉じた瞬間、

白豹『正真正銘の白豹だ。せつかくきてやつたというのに』

将臣『ほ、本物？』

白豹『偽物であつてたまるか。今日は盆でこつちとそつちの境界線が甘くなっているからな。特別だ。』

将臣『な、なるほど？』

白豹『わからぬならそれでいい。今日は頼みがあつてここに来た。』

将臣『…レナはやらないぞ？』

白豹『もうそれには興味がない。』

将臣『レナに興味が無いだと！？』

白豹『めんどくさいなお前！ そうじやなくてだな、私が朝武家の者に侘びを言つていたと伝えて欲しい。』

将臣『どういう心境の変化だ？』

白豹『けつしてあの男を許したわけではない。ただ、このような長い間に渡つて苦労をかけた。そのことを詫びずにいるのは私とてどうなのかと思つてな。』

将臣『…承りました。その伝言しつかりと預らせていただきます。』

白豹『いつもそう恭しくしていればいいものを。これでも神だぞ？』

『

将臣『そう言わると途端にやる気が失せるな。けどまあ、来年もここにくるよ。楽しみにしておいてくれ。』

白豹『フンッ、来年もお前と顔を合わせなきやいけないのか。期待しないで待つておく。』

すると、通信が切れたように白豹の声は聞こえなくなつた。でも、なんとなく最後は笑顔だつた気がする。

レナ「マサオミ、いくら早朝のお祈りでも寝るのはダメですよ?」

おかしい。俺はぱつちりと起きているし寝息も立てていない。ねぼけているのはレナの方じやないだらうか。

レナ「マサオミ、いい加減にしてください。」

そう言つてレナはまぶたを開ける。しつかり目を開けている俺と見るとキヨトンとしました。

レナ「マサオミは今、起きてますよね?」

将臣「うん、俺は目を開けながら寝るなんて特技は持つていない。」

レナ「そうですか、じや気のせいですかね?」

将臣「空耳じゃない? あ、空耳といえばさつきコママと話してきたよ。」

レナ「え! ジやあさつきのは聞き間違えじやなかつたつてことですか?」

将臣「うん。しつかり意思疎通できてたし、伝言も預かつてきた。」

レナ「羨ましいですね、私も話したかつたですよ。あつ! それなら…」

そう言つてレナは再び目をつむる。最初は難しい顔をしていたがだんだんと優しい面持ちへと変わつていった。

レナ「この寝息、叢雲様のですよ。」

将臣「ああ、なるほど。」

納得した。俺がコマの声が聴こえるというなら不自然な話ではない。彼の言う通り、境界線が緩くなっているならば可能性は高いはずだ。

レナ「なんだか嬉しいですね。幸せそうに眠りますよ。」

将臣「2人とも、幸せなら嬉しいね。」

そのあと、朝武家のお墓参りを涙ながらに済ませて伝言も伝え終わつた。

なんだか遠い昔の朝武さんのご先祖様がそばにいるような気がしあし、見たことはないけれど俺やレナのご先祖様も俺たちを包んでくれていてるようだつた。

コマの伝言はきっと彼らに届いたはずだ。今までの苦労のお返しはきっと彼らに送られたはずだ。

ある年の盆の日、燐々と夏の日がてる中、歴史ある穂織の町の大通り、

今までの長い長い旅路の先で、ある二人連れが手を繋いで、縁を繋いで歩いていましたとさ。